

道博協ニュース

第47号

発行所 北海道博物館協会
札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第三十三回北海道博物館 大会七月七日・八日 旭川市で開催

旭川市で開催

第三十三回北海道博物館大会ならびに平成六年度の北海道博物館協会総会、新装なった旭川市大雪クリスタルホールで開催します。以下のように決まりましたので多くの皆様のご参加を期待しています。

開催地について／その他
表彰式(三名の予定)

特別報告(11時～11:45分)

「日本における博物館の現状」日本博物館協会専務理事 毛利 正夫氏

記念撮影・昼食(11:45分～13時)

特別講演(13時～14:30分)

「生涯学習時代の博物館・園のあり方について」講師・釧路市生涯学習部長 澤四郎氏

シンポジウム「生涯学習時代の博物館・園と職員」

司会者・斜里町立知床博物館館長 金盛 典夫氏

報告者①室蘭市民俗資料館 館長 久末 進一氏

報告者②旭川市旭山動物園 副園長 小菅 正夫氏

報告者③小樽市交通記念館 建設準備室 主査 土屋 周三氏

報告者④北海道立旭川美術館

学芸課長 新明 英仁氏

学芸職員アンケート報告

第三十三回北海道博物館大会閉会式

主催者謝辞(北海道博物館協会会長)、次期大会開催地挨拶(松前町)

第二日目 七月八日(水)見学

旭川市博物館施設等視察見学

旭川兵村記念館・旭川市彫刻美術館・井上靖記念館・北海道立美術館・国際染織美術館

参加料

(1)大会参加料会員 三、五〇〇円(非会員 三、〇〇〇円)

(2)懇親会参加費四、五〇〇円

(会場：旭川市大雪クリスタルホール レセプション室)

宿泊について

市内ホテル等参加者各自申し込みとする。

事務局

〒〇〇四 札幌市厚別区厚別町小野幌 北海道開拓記念館 気付

昭和三十六年五月に東旭川開基70年を記念して設立後、57年四月に新館開館。明治25年に入植した旭川兵村四百家族の屯田兵関係資料が中心。

旭川市彫刻美術館

去る六月一日にオープンした。正式名称は「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館」が示すように旭川ゆかりの彫刻家中原悌二郎の彫刻を軸に同市創設の「中原悌二郎賞」の作品などを展示。佐藤忠良、加藤清ら巨匠の作中と合わせ、日本近代彫刻の歩みをたどることが出来る。

井上靖記念館

平成五年七月に開館した文学館。詳細は「道博協ニュース」第45号参照のこと

道立旭川美術館

昭和57年七月開館。道北ゆかりの作家の企画展を開催。七月上・中旬は「デイヴィッド・ナッシュ展」を開催中。

国際染織美術館

「染織文化の東西交流」をメインテーマに世界・日本の地域別・時代別資料三千点を収蔵。

北海道博物館協会 事務局

旭川市内見学施設の御案内

旭川市兵村記念館

北海道博物館協会 事務局

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

旭川市兵村記念館

博物館を退任するに当たって

渡辺 左武郎

私は本年三月三十一日を以て開拓記念館の館長を退任することになった。同時に北海道博物館協会の会長も辞任することになったので、この紙面を借りて御挨拶を申し上げたい。

私は明治四十四年札幌に生まれた老骨で、兼ねてから道

全国博物館大会を昨年秋季札幌で開催することになって、それが済むまでは辞めないでくれとの話があったので、北海道博物館協会の皆様にお手伝いをお願いして、無事大会を遂行することができた。

私は北海道大学医学部を昭和十年に卒業したが、学生時代から解剖学教室で児玉教授の指導を受け、始めは脳解剖学を研究していたが、昭和九年から北大解剖学教室ではアイヌ墳墓遺跡の発掘が始まって、私も八雲、落部、森の発掘について、昭和十二、十三

年は北千島占守島に遠征し、千島アイヌの遺跡の発掘にも従事し、形質人類学が専門のようになってしまった。

戦後は新設の札幌医大で、開設業務から始まって三十年に亘って一途に歩いて来て、やっと昭和五十五年に退職することができた。

札幌に生まれ、ずっと札幌から離れることなく過ごして来た私には、札幌に本格的な博物館のないことが不思議であった。北大予科の学生時代には、休講の時にはしばしば北大の植物園に出掛け、その内の博物館は何度訪ねたか数えきれない。

こんな状態の札幌に開拓記念館が開館したとき、私も招かれて、その立派な建物と充実した展示に感服したが、特に乞うて地下の収蔵庫をくまなく見せて貰って、やっと札幌にもこのような自慢のできる博物館ができたと感じた



ことは、今でもはつきり脳裏に刻みこまれている。

ところが昭和五十八年に野外博物館の開拓の村が開設されたとき、私は北海道に長く暮らしている人間として理事長を仰せつかって、博物館という私にとってはまったくの未知の分野に立ち入ることになってしまった。

次いで昭和六十一年には、高倉新一郎館長が勇退されて、私が三代目の開拓記念館の館長に就任することになった。単に非常勤の館長である外に、日本博物館協会理事、北海道博物館協会の会長をも勤める

ことになった。今、私は会長職を退くに当たって、先ず昭和二十六年に制定された博物館法を精密に読んで見たことを憶い出さずにはおられない。

東京で館長会議に出席したはじめの頃、毛利専務理事から意見を求められたとき、私は博物館法は改正すべきであると主張したことを憶い出しているが、改正は未だ実現されないでいる。

私は博物館は社会教育の立場から見ても欠くことのできないものであるが、寧ろ文部省ではなく、文化省という形のものが出て来て、その指導を受けることが発展し易いのではないかと考えている。(併し博物館を精しく理解しているとはいいい難い私の一つの意見であるかも知れないと思っ

北海道博物館協会には毎年各地で開かれた大会には欠かさず出席していたが、東京の日本博物館協会本部から毎年、毛利正夫専務理事に来ていたので、いつも毛利先

生と館の車で会場に向かった。今憶い出すと、私が最初に毛利先生と同車で大会に向かったのは増毛での第二十六回北海道博物館大会であったと記憶している。かなり長い車の旅であったので随分と話はずんで、その時以来私にとっては博物館がまことに身近な存在になったと思っ

開拓記念館に奉職して見て、私は始めてこの館の評価が全国的に極めて高いことを認識したが、それだけでなく、北海道の博物館活動が全国で高く評価されていることも知ることができた。

そうした誇りを胸に画きつつ退職できたことを私は心から嬉しく思っているし、今後の一層の発展を今は陰ながら見守りたいと願っている。

博物館の門外漢の私に寄せていただいた数々の御好意に感謝して止まないところでありますが、これからは北海道博物館協会や日本博物館協会にも個人の一会員として切角の縁を切らないでおきたいと決めているところである。

平成5年度秋期飼育

技術者研究会開催報告

日本動物園水族館協会北海道ブロック研究会が、11月25、26日登別温泉の「青嵐荘」を会場に、5園、6館23名が参加し開催されました。

会では、25日に研究発表と講演会、26日に研究発表と今年5月に完成した当クマ牧場の新獣舎等の施設見学と予定しておりましたが、25日に2日間の研究発表と講演会を終了させ、26日は、終日施設見学会に時間をとりました。

講演会は、「野生動物の現状と動物園水族館の関わりについて」と題しエコ・ネットワークの小川 巖氏を講師に迎え、減少していく動物、増えすぎた動物、帰化動物、傷病動物と、野生動物を4つのカテゴリーに分け、中でも救護という点に焦点をあて、国内では道内の交通事故死した野生動物の現状、海外ではポルネオの、セヒログオランウータンリハビリセンターの様子、

サリンガン島アオウミガメ保護センターの様子等スライドを用い、保護、増殖等密接に結びつき、ひとつに留まらずとても幅がある事など、現状評価を含めてお話しして頂きました。

また、動物園に望む事としてもっと自己主張をし、広い意味での環境教育等を行ってはどうか?と云う意見を延べ

られました。



研究会風景

私個人、深く共鳴できる意見でありこれからの動物園、水族館の進むべき道を強く考えさせられました。

研究発表は動物園8、水族館3の計11題が出題され、活発な質疑応答が行われました。演題名及び発表者氏名

一、バンドウイルカ (*Ursus ps. stilli*) の無保定血液検査方法について
 (小樽水 増田 まみ)

二、バンドウイルカの上腹部氣道に寄生する吸虫の駆虫
 (ニクス 高岡真砂子)

三、リンパ肉腫で死亡したエゾヒグマ (*Ursus arctos yessoensis*) にいて
 (登別 佐藤 光晴)

四、飼育水の改善試験について
 (小樽水 清水 大地)

五、当歳グマの野草菜食状況について
 (登別 鳴海 誠)

六、ベニイロフラミンゴの人工飼育について
 (旭山 高橋 久雄)

七、オオサマベンギンの飼育経過
 (釧路 高橋 悟)

八、キリンの檻捕りについて
 (円山 佐藤 正幸)

九、のぼりべつクマ牧場の増改築工事について
 (登別 佐藤 政司)

十、ヒグマに襲われたと思われるエゾシカの保護収容例
 (帯広 大沼 智彦)

十一、チンパンジーの道具使用について
 (旭山 高橋 久雄)



参加者全員

※園館名は日動水三字略称

最後になりましたが、講演を快く引き受けて頂きました札幌のエコ・ネットワーク代表 小川 巖氏に感謝申し上げます。

(のぼりべつクマ牧場 熊谷吉辰)

博物館学関係文献紹介

近年、博物館並びに博物館学に関する文献が数多く出されております。ただ残念なことは発行部数が少ないため我々、博物館人の眼に触れる機会があまりないことです。

以下、近年の刊行物にワンポイント加えて紹介します。

▼諸岡博熊「企業博物館時代」創元社、89年刊。三〇三頁、

企業の主要メディアとしての博物館論を展開。(一、〇〇〇円)

▼加藤有次他編「博物館ハンドブック」雄山閣、90年刊。

三三五頁。学芸員資格取得者の教科書(三、九四円)

▼丹青総合研究所編「博物館情報検索事典」丹青社、86年刊。五四四頁。世界の博物館

情報を網羅。

道美学芸研の設立経過と現在

満足してまだ三年目だが、北海道美術館学芸員研究協議会（略称・道美学芸研）にはその前身となるものがあつた。あるいは母体と呼んでもよい。

それは道立の美術館学芸員による研究協議会で一九九〇年の旗揚げであつた。いま思えばその構想は、前年、近代美術館をはじめ、旭川、函館、そして三好好太郎の各道立館の共同編集による『紀要』の発行あたりまで遡ることに



1993年度総会・研究会の日本画の保存修復研修

況にあり、ここで考えておかなばならない課題の一つに学芸員の調査・研究活動があつた。

道立美術館の設置が増すたに当然、人事交流は活発となる。それに伴い学芸員の研究の専門性の継続、発表の機会の不均衡などの問題を孕むわけであり、それをすこしでも是正する方途として『紀要』の共同編集・発行へと踏み切つたわけであるが、さらにこの研究環境の変化に対応すべく共通の研修の場として先の研究協議会が誕生したのである。それほど遠い過去のことではないが、ワープロ文字の切り張りの会報作成がなつかしく思い出される。

さて当時の北海道全体の美術館状況も新たな時代へと歩を進めつつあつた。芸術の森美術館の開館を皮切りに、釧路に美術館機能をもつ生涯学習センターや岩内町には荒井記念美術館、鹿追町の神田日

勝記念館が順次オープン予定にあり、さらに岩内町には木田金次郎美術館設立の構想もあつた。九十一年の北海道博物館大会のシンポジウム「二十一世紀をめざす博物館・園のあり方をさぐる」で、このような状況に触れて私は

「地理的あるいは機能的に共通の基盤に立つ美術館が、将来にわたって連携していかなければならぬだろう」と述べたが、これは決して希望的観測ではなく、新たに設置される館の多くになんらかのあたりで関与してきた我々としては、その延長線上に実現しなければならぬ課題であつたのだ。美術館関係者の出席は少なかつたようだが、前年の大会のテーマは「ネットワーク化」であつたから、それなりの共通理解は会場から得られたと思つてゐる。

かくして九十一年秋、道立美術館という枠をはずして道美学芸研は10館・33名（現在14館・37名）の会員で再出発となり、十二月には総会、研究会が開催された。これまで



1993年度総会・研修会

の研究会の内容は、修復家を招いての保存修復に関する研修、会員の研修・研究発表報告、日頃の問題点等の研究協議などであり二日間にわたつて行われてきた。年一回の開催ではあるが、出席率は90%に達している。またこれらの内容は、抄録として会報に掲載してきた。手前味噌かもしれないが、これまでなんども参加した全国規模の大会よりはるかに得るところがおおきいと思つてゐる。その理由はさまざまに分析されようが、再出発にあつたの会報の巻頭文にある次なる趣旨の反映があるからだ、と私は思ふ。

「当面はまず、広い北海道の各地で黙々と美術館の仕事

に励んでいる学芸員の存在をそれぞれが知り、理解を深めることが大切であろう。個々の学芸員に実りをもたらす真の意味での研修の場とは、会員相互の親近と信頼の関係を前提にすると思われからた。」（奥岡茂雄・道美学芸研会長）

回を重ねるたびに、こうした研修の場は「マンネリ化」という病気にかかりやすくなる。始まって間もなく、まだ歴史も伝統も築きえていないが、やはりそれが最も恐れることである。これを回避するのは、やはり会員各自の自己実現のための参加の意欲力であろう。任意団体であるが故になおさらである。現在、今年度の総会・研究会の実施計画に着手している。会報も仕様、デザインを一新し、内容も会員の日頃の調査、研究の「覚え書き」や展覧会、普及事業の「実践メモ」を紹介する「研究ノート」を新たに設け、七月末の発行をめざしている。

（道美学芸研幹事長・鈴木正實）

「この虫なんですか」博物館に名前をたずねにくるのは、よくある光景である。

「これはアカヒゲホソミドリメクラガメ」舌を噛みそうな名前を図鑑もみずに答えると、さすが虫の先生と感心される。水稲のよく知られた大害虫である。

反対に、考えあぐねて「ヒゲトハネカクシの一種」と答えると、「ちゃんとした名前は・・・と、さらに調べることを要求される。「解剖をして内部を調べないと、正確な名前はわからない。研究されていないグループだと、専門家でもわからない」と説明すると、狐につままれたよう。説明をしたこちらも後味が悪い。

しかし、この「〜の一種」という名前(英語ではgenus)、昆虫畑では類繁に用いられる。種の数およそ三百万種、日本国内でも十萬種はくだらないといわれるグループなのだから、当然といえば当然である。さらに体長五ミリ以下のものが多く、同定には実体顕微鏡

が必需品。外側から見ただけで、名前の決定できるものは少なく、生殖器の解剖が必要。

これらの理由から、昆虫の「同定」は、ある特定の専門家にゆだねられた、職人的なわざをも必要とする作業となっている。一般の人はおろか、昆虫担当の学芸員にさえも簡単にできるものではない。

さて、私の専門である甲虫



類は、昆虫の約三分の二を占める大所帯である。したがって研究者も多いが文献も多く、すべてを把握するには超人的な能力が必要となる。

ここでは甲虫類の実用的な図鑑類を紹介するのだが、昆虫担当以外の学芸員の方には「〜の一種」同定をお勧めする。属まで調べて、「〜属の一種」とすれば記録としてもまちがいでないし、標本さえしっかり残っていれば十分

に将来の活用が可能な記録となる。むしろ、強引に種までおとし、まちがった同定が一人歩きするほど、記録を混乱させるものはない。

必要とする機具

実体顕微鏡や25倍のルーペでも外部形態はいくらか調べられるが、解剖となるとお手上げである。倍率の高い五十万円くらいのをそろえて

ラと見て、かたちの似ているものを見つける。見当をつけた種の記載を読み、分布、特徴などをチェックしてみる。記載と一致した場合、次に目録を引いてみる。その種ののっているページを開き、その種の含まれる属のすべての種が、図鑑にのっているかを確認する。

新たな種が目録になければ、図鑑には日本産既知種のすべてがのっていたと考えられるため、見当をつけた種であろうと判断していい。

新たな種があった場合、さらに文献を調べない限り種名決定はできないので、「〜属の一種」としておくしかない。

しかし、この方法には大きな落とし穴がある。まったくちがった属や科でも、かたちの似たものは多く、絵で見当をつける段階で大きくまちがうことである。これを避けるには次の方法を採用する。

(2) 「検索表」。図鑑(Ⅰ)に二十ページにわたる科までの検索表があり、これをつづつ丁寧にたどっていく。こ

わ方法は二つある。(1)「絵あわせ」。図鑑の写真をパラバ



の際、さまざまなからだの部分の名称がでてくるため、かなりむずかしい作業となる。

相当の時間と知識を必要とするので、普段から検索表をひいて、練習をしておく必要がある。これを行っている人は、つまり専門家である。昆虫担当学芸員以外は結局(1)を採用することになるだろう。

進化学者マイアー先生も「博物館の標本は科まで分類し、後は専門家にまかせべし」といっている。昆虫のように膨大な生物群は「〜の一種」「〜の仲間」という同定でよいという認識があってもいい。

館・園紹介

旭川市博物館



平成五年九月一日に開館した旭川市博物館は、旭川市の開基百年を記念して音楽堂・国際会議場を併せた複合施設「旭川市大雪クリスタルホール」の一施設として建設された。

チダモ、トドマツを選んでシンボリックに展示し、それととり囲む回廊部には堅穴住居、笹葺住居、屯田兵屋、現代の住居を復元移築して時代ごとの生活を示し、短時間で旭川の概要が理解できる構成とした。

旭川市の博物館は昭和二十七年に旧北鎮兵事記念館建物を転用して創立され、その後、昭和四三年に旧旭川借行社建物に移転。そしてこの度初めての専用建物として新築したものである。

下層階には中央部に「上川盆地の生いたち」「冬の自然」「旭川の自然」「大雪山の自然」といった自然系を配し、人文系はそれととり囲むように上層階の各時代の住居と対応する位置に「先土器時代のくらし」「縄文・続縄文時代のくらし」

建築設計競技による建物だが、それに先だって展示は「北国の自然と人間のかかわり」をメインテーマに二層階構造の常設展示室（一、五四九㎡）で展開することに決定された。

上層階は導入部「四季の回廊」を通じて中央吹抜け部に、旭川地方の森林を構成する樹木の中からイタヤカエデ、ヤ



らし」「擦文時代のくらし」「ベニウツクルのくらし」「開拓期のくらし」「発展期のくらし」「今日のくらし」の順に時系列的に配置して、各時代の生活をより詳しく示した。

またハイビジョンコーナーは大雪山の雄大な姿を九二インチ大型スクリーンに再現する「感動コーナー」と大雪山に関する情報を得ながら山頂に着く登山シミュレーション映像の「挑戦コーナー」で構成した。特別展示室（三三三㎡）は回廊部分に隣接した位置とした。

入館受付カウンターのあたる情報センター（八四㎡）は当館の特色としてあげることができる。図書閲覧コーナーのほか、博物館の持つ情報をコンピュータで検索する電子図鑑の検索システムを備えている。このシステムは地図と文字から資料を検索するライブラリーモード、色や形などイメージで検索するサーチモード、まちを探検しながら学習するアドベンチャーモードの三つのモードで構成され、容

易に地域に密着した検索を進めることができる。また館員が常駐して市民の情報ニーズや相談に対応する体制として

普及活動のための郷土学習室（一二八㎡）は講座等のほか体験学習のための水道とガスの設備をもち、学校教育の活用を考慮して二学級八〇人収容できるスペースを確保した。収集整理保存関係では荷解室（一〇七㎡）のほか洗浄室（五八㎡）、燻蒸室（二八㎡）、物性に合った資料保存のための収蔵庫三室（八三七㎡）を設けた。

博物館としての施設設備はこのように一応整ったわけだが、今後の課題はその活動である。急激な社会変化と生涯学習の高まりの中で、博物館に対する市民ニーズも変化しつつある。収集や調査研究を通して地域に関する情報をいかに多く蓄積するか。そしてそれをいかに効率的に普及活動を通して市民に提供し得るか。一言でいうとこれが最大のテーマであり、七人の職員

がこの目標に向けて努力しているとこである。

〈旭川市博物館案内〉

開館時間 午前九時から午後五時まで

休館日 毎月第二・第四月曜日 年末年始（一二月三〇日から一月四日まで）

入館料 一般四百円 高校生三百円 小・中学生百円（団体二〇人以上 一般三百二十円 高校生二百四〇円 小・中学生無料）

交通 旭川電気軌道バス④番 神楽四の七下車 道北バス④番 神楽四の七下車④番 開発道路事務所前下車

問い合わせ先 旭川市博物館 〒070旭川市神楽三条七丁目 四〇一六六一六九一

二〇〇四 FAX 〇一六六一六九一 二〇〇一

（旭川市博物館 館長 其田良雄）

館・園紹介

かみすながわ炭鉱館



三井鉱山株式会社によって石炭の採掘がされるようになり、国内のエネルギーを支える基地として、北海道の主要炭鉱町として発展した上砂川町。増産にともない人口の増加、施設の整備、経済の向上など、人びとの生活にもゆとりが感じられるようになりました。しかし、石炭から石油へとというエネルギー革命により石炭の需要量が減少するにつれ、国の第八次石炭政策のもと昭和六二年七月、やむなく閉山を強いられ、町は社会

的にも経済的にも大きな打撃を受け、人口が減少し過疎化に一層拍車をかけました。いま、かつての町が歩んだ歴史や文化を振り返り見て、豊かな自然の中で暮らしてきた先人たちの英知と知恵を、残された歴史遺産を通じて学び、新たな町づくりの原動力にすべきであろうと「炭鉱館」の建設計画が平成三年から進められました。

た鉱夫をモデルにした敢闘像が、町を見守るかのように堂々と建っており、ピラミッドを思わせる二つの三角形の屋根は、七三年間の炭鉱の歴史を物語る「ずり山」をイメージして作られています。館内には、常設展示室、特別展示室、ホール、ロビーなどの各室を設け、野外展示場には水力採炭自動モニター、蓄電池式機関車・鉄製炭車・電気機関車、サイドダンプローダーが展示され、来館者が自由に観覧できるようにになっています。



展示場内部

重力プラザ・コンベンションホールがあり、近日オープン予定の無重力科学館とあわせて相互利用の促進を図り、過疎化に歯止めをかけるべく観光施設、教育施設として、まちの活性化につながることを願っています。

〈かみすながわ炭鉱館案内〉

。開館時間

午前十時から午後五時まで

。休館日

毎週月曜日 年末年始(十二月三十日から一月四日)

。入館料

大人百(八十)円

小・中学生 五十(三十)円

()は十人以上の団体

。交 通

旧JR上砂川駅から徒歩で三分(中央バス利用)

。問い合わせ先

かみすながわ炭鉱館

〒〇七三〇二

空知郡上砂川町字上砂川二

二番地

〇一二五六一二二八八五

(上砂川町教育委員会社会教育課長 伊藤伸一)



上砂川炭鉱館全景

の「かみすながわ炭鉱館」がオープンしました。場所は、道道芦別砂川線から分岐した通りに面し、旧JR上砂川駅の近くにあり、交通の便の良いところです。建築規模は、一〇五〇〇㎡の敷地に延べ面積七三九㎡、RC構造平屋建て。館の手前には削岩機を持つ

館内の各コーナーは 一、『上砂川町の自然』―豊かで変化に富んだ四季、特徴的な地理条件と生息する動植物、山間部における地形・地質と町並み 二、『上砂川の開拓』―開拓当時の様子、炭鉱が開かれた頃の様子、町が誕生するまでの様子 三、『水力による採炭』―初期の採炭技術、水力採炭の技術、町の交通・通信 四、『豊かな上砂川の町』―

町の発展の様子、人びとの生活の変化、これまでの町の産業と文化などに分けて、貴重な写真や映像など、ゆかりの資料、解説パネル等を組み合わせて展示してあります。特に、炭鉱住宅コーナーでは、炭住での一部屋で家族が夕食を前にし、楽しみに会話している様子を人形によりリアルに再現し、また、水力採炭コーナーでは、採炭状況を原寸大のパノラマを用いて、採炭技術の仕組みなどを臨場感ある造形と音響で示すとともに、疑似的な体験ができるように工夫されており、来館者の人気を博しています。ここには他に、世界最長の地下無重力実験センター、無

館・園の主な行事計画

道立帯広美術館

7・16～8・14 「ドイツ表現主義の版画展」

8・20～9・18 「紅型―琉球衣装の美」

9・23～10・23 「ナンシー美術館名作展」

道立旭川美術館

6・18～7・17 「ドイツ・ド・ナッシュ展」

7・22～8・14 「信仰と詩心の彫刻六十年・舟越保武の世界」

8・20～9・4 「Print Works:アート・セクション 凸凹」

旭川 「風と大地と緑と水と」

9・10～10・16 「ミルウォーキー美術館所蔵・20世紀美術の巨匠たち」

札幌芸術の森美術館

6・23～8・24 「印象派とフランス近代絵画の系譜」

8・31～10・16 「北の創造者たち」

札幌芸術の森工芸館

7・3～9・4 「札幌周辺の作家によるクラフト家具展」

滝川市美術自然史館

6・18～7・17 「BIRKBECK ショーン世界絵本原画展」

7・23～8・14 「おおば比呂司さとがえり展」

道立近代美術館

8・17～21 「全道展」

7・12～10・2 「極北のイヌイットアート展」及び「パリー・ナンシーフランス二都物語」(常設展示室)

20世紀絵画展

7・12～8・14 「変貌する20世紀絵画」及び8・20～10・2 「変貌する20世紀絵画」

(特別展示室)

小樽ヴェネツィア美術館

6・2～7・27 「ラヴェンナ・モザイク展」

道立三岸好太郎美術館

7・14～8・28 「黄色い鋼鉄船―三岸好太郎と独立展創立の画家たち」

道立文書館

7・5～6、12～13 「古文書解読講習会」

北海道開拓記念館

6・25～7・20 「永倉新八郎資料―杉村家資料の紹介」

東諸民族の歴史と文化

8・12～14 「北海道郷土民話」

8・7、21 「伝統技術」

9・17～18 「秋のふるさとまつり」

留萌市海のふるさと館

7・23～8・28 「留萌の昆虫展」

苫小牧市博物館

7・24～8・26 「マンモス展」

八雲町郷土資料館

7・29～9・3 「縄文時代の生活展」

恵庭市郷土資料館

7・23～9・25 「冬山造材と馬―開拓の陰の主役たち」

青函トンネル記念館

8・9～16 「記念館まつり」

有島記念館

青少年公募絵画展

8・6～8・19 「有島武郎 下川展」

岩見沢郷土科学館

7・23～8・21 「貝殻展―海からの贈物」

10・1～30 「わが家の家宝展」

苫小牧市科学センター

7・1～8・7 「プラネタリウム特別撮影―七夕特集」

道立北方民族博物館

7・26～8・28 「あそび・ゲーム・おもちゃ」

札幌市資料館

4・5～7・24 「文学・北の歳時記展」

8・2～11・27 「文学展・札沼線の旅」

事務局通信

新年度の人事異動等により次のおり役員の変更がありました。

役員の変更・追加

〈会長〉 城戸崎 彰氏

〈理事〉 福井正繼氏(札幌) 岡山動物園長、森永修正氏後任)

〈顧問〉 渡邊左武郎氏

(三月三十一日付会長降任により役員会において決定)

・新事務局の体制
当協会事務局を置いている北海道開拓記念館の業務調整等により、新年度の事務局体制は次のようになりました。

事務局長・野村 崇

事務局次長 小田島和平

事務局員 藤田昇治、手塚 薫、水島未記

事務局日誌

4・20 「道博協会報No.34」

等発送

5・10 新事務局の発足

5・18 第33回道博協旭川 大会打合せ(野村、小田島)

5・24 第33回道博協大会 開催要項等発送

5・30～6・1 平成七年 度大会開催要請のため松前町出張(野村)

5・31～6・2 平成七年度会計監査のため利尻町出張(小田島)

6・18 持ち回り役員会において平成六年度表彰者並びに前会長渡邊左武郎氏の顧問就任決定